



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 堂友の断想雑録                                                                             |
| Author(s)    | 藤塚, 誠二; 中川, 幸三; 山本, 櫛信 他                                                            |
| Citation     | 懐徳. 1966, 37, p. 117-130                                                            |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/90435">https://hdl.handle.net/11094/90435</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

務理事は空席の儘今日に至つてゐる。

なお、本年六月、惜しくも逝去された武内顧問について追憶を書き添えたい。

武内義雄博士は北野中學、三高より京大文學部に學ばれた篤學の漢學者であるが、懷德堂再建の際には府立大阪圖書館に在つて盡力して下され、開講後は永年専任講師として聽講生の指導啓發に當られ、懷德堂から中國に留學されたのであった（この中國留學は堂の講師吉田銳雄氏が中國へ研究に出られた際文部省在外研究員となつてゐることに關連する）。かくて大正十二年三月東北帝大教授に任ぜられたのであるが、その時私が小倉、今井御兩所のお話を拜聽して印象が深かったのは、舊懷德堂の五井蘭洲先生が仙臺伊達侯に招聘せられ、大阪より赴任せられた故事に擬えて語つてゐられたことである。武

## 堂友の斷想雜錄

西村天囚先生書「忠僕茶屋」舟板の額

藤 塚 誠 二

この西村天囚先生（懷德堂記念會創立者）書、舟板の

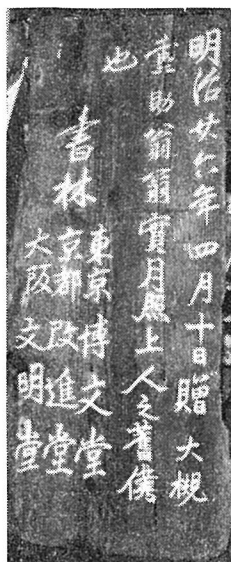
堂友の斷想雜錄

内先生は東北帝大に在任中學位を授與され、後には法文學部長になられ名聲一世に高かつた譯であるが、終戦後は宮中にも出仕、皇太子殿下の讀書、書道の指導役になられたことは記憶に新たなところである。また内藤・狩野兩顧問の歿后懷德堂顧問に就任せられた。私は古く大正の頃小倉さんの命を受け、文章の添削を請うべく東吹田の御宅迄伺つたことがあり、多年懷德堂を通じ警咳に接すること屢々であつたが、近年には公刊された決定版「論語」を受贈、また立派な双幅の墨迹をも拜戴するなど、年來の御高誼御示教には感銘に堪えないものがあり、光榮至極に存じてゐる。茲に先生が一生を通じ懷德堂に對し、親愛の情を以て見守つて下さつた御盛意に、深厚なる敬意を表して筆を擱く次第である。

額の「忠僕茶屋」というのは大槻重助という人が開いた、清水寺の山門をはいつた所にある甘酒茶屋のことである。（今は孫に當る人達で、この甘酒茶屋と、清水坂に大槻香月堂という土産物店を經營している）大槻重助は丹波の出身で、清水寺本坊成就院の住職月照の下僕と



額の表



裏

して仕え、月照、西郷隆盛、海江田信義等が、京都から難を鹿児島に避ける時随従し、又月照が、隆盛と入水（安政五年）する時も、平野國臣と共に随伴していたほどの、非常な忠僕であつたので、後に、隆盛の弟、西郷從道（侯爵）海江田信義（子爵）の二人によって、忠僕茶屋と名付けられ、それ以來忠僕茶屋という屋號にしている。重助は月照の入水後、幕吏に捕えられたが、赦され（文久二、三年頃か）て京都に還り、明治二十六年四月六日に歿した。重助が甘酒茶屋を開いたのは、恐らく

赦免されて京都に還ってからであろうが、當初は「大笹屋」という屋号であつた。

天因先生は、この甘酒茶屋によく來られたそうであるから、重助の忠僕であつたことを知り、感激して、月照、隆盛が舟から入水した縁に因んで、舟板に書かれ、博文堂、改進黨、文明堂の三書店が、寄贈したのだと思う。

（博文堂は、天因先生著小説「屑屋の籠」を出版した書店）

私が吉田先生（懷德堂三代目教授）から、清水の甘酒茶屋に、天因先生の書かれた額があるということを聞いたのが、大正十三、四年頃である。どういふ額か、ぜひ一度拜見したいと、二三度甘酒茶屋を訪ねたが、拜見できなかった。ところが幸い去る四月十七日酒井全太郎氏と同道して訪ね、實に四十二年ぶりで拜見するを得た。忠僕茶屋の額のいきさつや、月照、隆盛海江田信義、重助等の關係については、詳細な記録を保管されている重助翁の孫、大槻香月堂主人が、目下入院中で、詳細を知ることができなかったのは残念である。

（昭和四一、八、一三）

# 日曜日の懷徳堂

中川 幸三

## 論語朝講

大正八年秋、日曜朝講が開かれ、松山先生の擔當で論語を午前九時から一時間講義されることになった。これは昭和二年先生の御病歿によって遂に廢止されるまで約八年つづいたが、御精勤な先生のこととて、その間缺講は殆ど無かったと記憶してゐる。

講義は義理を主とし實踐を重んぜられたことは勿論だが、訓詁考据の面も精審に、時間をかけて懇切に講せられるので、進度は遅いが、聴講者も大に啓發されて、倦むことを知らなかった。

抑も懷徳堂堂舎は東堀川に面した舊西町奉行所の址、明治時代に入って博物場となったが外廓、構内はよく舊構を存してゐた、その西北隅の一廓に建立された。従つて當時の大阪としても珍らしく、昔ながらの閑寂さが残つてゐた境地である。

日曜の朝の静けさを撃柝の響が破る。やがて、紋付羽織袴姿の先生が悠々と壇上に立たれ、徐ろに論語の章句が讀まれ、次で諄々と解説されてゆく。端然たるお姿は

左手で右の袂を押えて板書せられる時だけ動く。

廣い大講堂には定連の聴講者は、概ね二十數人、多くても三十人を多く越えないから、空席の方が遙かに多い。しかし、先生はこの大講堂がお好きであつた。この講堂の壇上に昇つてこそ師道の重大さを感じるとの信念で、講學教化のため、日曜日に敢えて開講し自らその任に膺られたさうである。

先生の講義は山がない、寧ろ平淡であつたが、一言一句にその御人格が滲み出てゐて聴者の胸を簞々とうち、いつしか今こそ聖賢の教を聴聞してゐるのだとの念にひたつたのである。

時刻は日曜の朝、環境は閑淨、講するその人を獲て、論語は生きて一入深い感銘を與へるのであつた。

時移つて早や四十餘年、往時の堂友が會談すると、常にこの事に話が及んで、懷を新にする。故狩野先生が、天が懷徳堂の爲に拵へた人だと評された松山先生の徳化は、永くたたえられてゆくであらう。

## 同人會の輪讀

大正十年頃であつたらうか、日曜朝講の後輪讀會をやらうと首唱したのは石井宗一、山本樞信、高砂清一の諸兄だったと記憶する。今川せい、青木潤、不破重三、河

野清光、貝田四郎等十餘人。年は二十代が多かった。南の小講堂で松山先生の臨席をお待ちする。講義のお疲れも厭はで、先生は溫顔を浮べて各人の勝手な珍説をきいて居られる。

テキストは、初めの頃は先生に擇んで戴いたものを、高砂君が、惚れ惚れする様な鐵筆書きを鮮かにがり版刷にしてゐた。それが鉛印唐文評註讀本になり、最後は曾國藩の經史百家雜抄を用ゐた。その頃には武内先生も隔週に出て下さることになり、皆愈々熱心になって來た。一週間の下調の餘裕はあるものの、曾國藩の輯めたものは中々むづかしいものが多く、圖書館へ通ったり、夫れ苦勞した。松山先生は高師の、武内先生は高校の學生よりは善く讀めるよと賞辭(?)を戴いて、皆の努力も拍車がかつた効もあつてか、中等教員資格檢定に合格した二三子もあつた。

武内先生からは時々日頃御研究の片鱗を洩されたり、攷學の指針を與えられたり、思ひ懸けない示唆を蒙つた。これは定日講義の諸子概説、曾國藩の家訓講義と共に、斯學に對する大きな興味を皆が惹起した。故高砂清一が支那學專攻を決意したことはその一例である。

しかしこの會は武内先生が仙臺に去られ、松山先生が歿かれた後は遂に立消えになつてしまつた。

この輪讀會がすむと己に正午だ。堂を辭して川沿に歸途に就く。右手の東横堀川畔はかなり廣い斜面地になつて、そこには相當の植込があつた。中に二股の柳が一株あつた。根元は優に一抱に餘るが、宛も双手をひろげた恰好に繁茂して壯觀を呈してゐた。西村先生が是れは大阪一の名柳だと稱されたとときく。

今、此界限は見本市會館等の駐車場に充てられて平坦に整地され、本町橋上は車の流れで眼もくらむばかり。上は高速道路が川上を覆ひ南北に走り、見下すと川は黝んで微かに臭く、往時の面影は全く偲ぶ可くもない。

## 本町橋界限

山本 檜 信

大阪市東區を北から南に流れている東横堀の中間に架つてゐる橋が本町橋で、北のが大手橋、南のが農人橋である。この橋の東詰、一筋北の辻、東南角に、大正初期再建の懷德堂が建つてゐた。石垣があり、その中央に黒い木の門があり、三宅石庵先生揮毫の懷德堂という大きな表札が、かかつてゐた。本町の一筋北の安土町に住んでいる私は、欲ばつて時間ぎりぎりまで仕事をしていた

聴講にかけつけた。本町橋と大手橋との中間に橋があったら、まわりみちをせず、まっすぐ、とんでゆけるのにも思つたものである。木樺を聞きながら、やれやれ間にあつたと門をくぐったところに、丸い石が敷きつめてあつて走りにくくて困つたものである。正面に講堂、左手に事務所、講堂の左横手に、後に建てられた耐震耐火の三階建の書庫があつた。忘れもしない、昭和二十年三月二十日深夜の空襲にあつて焼けてしまつた。大手橋西詰に移動していた警防團本部から眺めたとき異状なく、たすかつたと思つたのも束の間、講堂の裏手、産業能率研究所との間に置いてあつた自動車のガソリンに引火したということ、書庫を残し、なつかしい講堂も事務所も灰燼になつてしまつたのである。

現在、国際ホテルのあるあたり東町奉行所の跡だといふことである。幼少のころ、そこに博物場というものがあり、黒壁に白の太い壁を交差した長屋があつて、陳列室になつたり農産物の品評會に使はれたりしてゐた。その長屋の中央に門があり、その門のつきあたりに赤煉瓦造りの美術館があつた。場内は小規模の動物園になつていて、今、府廳屋上にある釣鐘が片隅に置いてあつた。場内の南東にあつたお稻荷さんのそばに茶室があり、北側にあつた能樂堂は天満宮境内に移されて、今残つてい

る。懷德堂前の川岸のあたりに巡航船の發着場があつた。電車のないころ、道頓堀へゆくのにさかんに利用したものである。博物場門前の川岸に大阪で一番古いといふ柳の大木があつて天然記念物になつてゐたが、見本市會館建築材料運搬の邪魔になると、取りはらはれた。吉田先生は涙し、長詩を賦して惜しまれた。懷德堂から少し北へいった東側に、木綿問屋をしてゐられた平野得三さんのお宅があつた。

本町橋の東詰、北東角に大阪織物商組合の三階建の洋館があり、南東角に牛肉すき焼屋があり、そのならびの少し東に鐵砲家というすしやがあり松屋町筋の西南角に藥屋さん野口幸雄さんのお店があつた。松屋町筋をこえたところに弘豚社という大きな牛肉屋があつた。内本町松屋町筋の西北角に、藤井健治郎先生が、ときどき食べにやられた更科といううどんやがあり、そのならびの西隣に五郎八という、のき店があつた。寒い晩など酒井全太郎さんに誘はれて、こっそり這入り、シチュウやコッブ酒に暖つたものである。安くてうまかつた。松屋町筋を北へいった東側に宇野さんという藥局があつてお子さんが素讀生として懷德堂へ來てられた。懷德堂の北横町に堀見さんという有名な醫院があつて、講義にみえた京大の先生方で遊びに寄られる方もあつた。

本町橋の東詰を南東へ斜めに松屋町筋に出るところに生国魂神社の御旅所があり、俗におたびといっていた。旭堂南陵さんの席があつて講談難波戦記なんかやつていたが不入りだった。東横堀は本町橋と農人橋との間が曲つていて俗にまがりといっていた。泳いだりするとガタロがお尻から血をすつてしまう。まがりではまると死體が浮いてこないという話があつた。晒し屋があつて、川邊の小屋で晒し、高い干し場で干す動作が曲藝のようにあぶなく見えた。本町の一筋南の通り南本町の横堀へつきあたつたところの石段下へらんちゅうという金魚の餌アカコをとりに行ったものである。川の底にいるアカコがよく見えるほど水がきれい、女中さんなんかよく洗濯に來ていたものである。南本町の東横堀近くの西側に懷德堂へ講演にみえた先生方がよくお泊りになつた葛谷旅館という商人宿があつた。農人橋通松屋町筋を東へ上つた南側に、顔料問屋をしていられた中川幸三さんのお宅があり、その東南に、今川せいさんのお宅、天理教會があつた。

本町橋東詰北側の石段を下りたところに、かき舟がつながれていた。その向い岸のところに、古くからある、あみやという舟座敷の料亭があり、地方から來阪の商客を、夏、大川へ涼みに小舟で案内するとき、料理をとつ

て積みこんだものである。靜安學社の集りのあと、石濱先生たちと龜田先生を案内し龜田先生の氣焰にあてられたこともあつた。西詰の川岸にむしぶろがあつて風邪をひくと父につれてゆかれた。脱衣して下へおり、むしぶろの中で腰かけて汗を流し、出てからガラス窓の外の川の景色をじつと眺めたものである。

本町橋西詰の西北角に東區役所、本町通堺筋の北東角に東警察署、その東隣に東消防署があつた。消防といつても昔は幼稚なものであつた。火事だといつと半鐘がなり出す、人氣者の消防吏さんがあつて東一とか二とか書いた大きな高張提灯をかつぎ出す、お店の丁稚さんなど大ぜいかけつけ、かけ聲勇しく太綱をひっぱつて走る。火事場へ着くと、かえれかえれと追つ拂はれる。それでも亦火事があると若いものが一目散にかけつけるのであつた。東警察署向いの東南角にあつた呉服問屋稻西合名さんの角を南へまわつた東側に砂糖問屋をしてられたことのある素封家伊藤茂雄さんのお宅があつた。張先生と伊藤さんと私の三人が、本町堺筋のまっくらな角で別れたその夜、まもなく大空襲があつたのでなかつたかと思う。本町堺筋の角を西へ三筋ほどいった南側に酒井全太郎さんが會計主任をしていられた洋反物問屋伊藤新商店さんのお店があつた。

本町の一筋北の通り安土町一丁目板屋橋筋の西南角に汎愛幼稚園の古い木造校舎があり仁の字を二重丸にしたのが校章で瓦町の指薬屋中井一馬さんが園長をしていられたが死なれた後、汎愛小學校の飯田吉太郎校長さんが兼務され、タゴールさんのような名士が大阪にみえるによく案内されたものである。幼稚園の西隣、木原さんの庭に大木が多く白鷺が巢をつくっていた。安土町通堺筋を西へはいった北側に水落露石さんが住んでられた。小間物問屋をしていられたという家持ちで、子規、漱石、虚子等と親交のある俳人で、懷徳堂の講演もよく聴きにみえ、講堂右側前方の別席に腰かけて聴いてられたものである。水落さんから一筋西のところに私の店があり道路改修のために店舗改築の際、高瀬先生に看板を書いてもらって軒の上に掲げていたものである。小川（琢治）先生から先生の御父上が紀州から出てきて安土町で醫者をしていたことがあるがその場所がわからぬかというお話だったが今に探してあてずにいる。

安土町の北へ三筋目が淡路町で舊浪速橋筋東側に石濱先生の丸石製薬さんがあり、その一筋北の平野町堺筋東へ入る北側に上野先生のお宅があった。淡路町堺筋東南角に汎愛小學校があり、その近くに藤澤南岳先生が住んでおられ汎愛懇話會の會長をしておられた。

かような話を書いていると切りがないのでやめますが、本町橋界隈の昔の雰圍氣の一端でもわかっていただければ幸いである。

## 無 題

岩淵賢治

若い頃は終日よく働いて夕刻より懷徳堂へ聴講に行く事が楽しみでした。静かな講堂に這いり、座席に落付き、開講の時間を待っていると、合圖に木樨が鳴り始めます。其音色が厚味があるが柔かで、堂内に餘韻が流れました。其一瞬私は深呼吸をして心臓の鼓動を調整するような安らぎと休養を身を感じるものでありました。常に豫備知識を持たない私は、萬葉集の開講された時でした。漢字にて謄寫版刷りの半紙を二、三枚貰いました。和歌と言へば平假名で書いてある物と思っていたのに是は漢文であるのはどうした事かと思いました。講義に入って讀んで行かれると、音讀であるから讀めます。初めて萬葉假名であるという事を知りました。當時の講師は女性的の親しみ深い林森太郎先生でありました。其頃森鷗外先生が文藝雜誌其他の書物で有名でありましたから、私は森林太郎先生が講義に來られたと誤認した事です。

聽講生等に依て作つた堂友會が有り、或日見學遠足に行きました。私は松山先生にお詫びをするようにして話した掛けた事があります。それは私は毎日働く事に追はれて休暇の時間を持ちませんでした。だから聽講する時間が私の休養という事になり、講義を拜聽して歸つても復習ができませんでした。恰も新聞を讀んでいるのと同じでありますから、先生に其様に言つて謝りました。先生は私に、誰れも餘裕の時間は有るもので有りません。聞くだけでよろしいと慰められたのです。西村天囚先生の孟子の講義の時でした。世間ではあの人は賣名的にした善行だから偽善者だと輕蔑する者があつても、それでもよろしい、善は善であるから幾回も續けてすれば、誠の善に成るのである、偽善と言われても世の爲になる善い事は少しでも行いなさい、と話をされました。眞に勇氣の入る事であります。私の心に其教へがいまだに残っております。それで阿倍野の墓地へ我家の墓參に行つた時は、先生の墓前に感謝しております。私の弟が吉田銳雄先生に孟子の素讀をして貰っていた時であります。孟子の終りの方を習つておりました。然るに西村先生に聽講している私は、まだそれまで進んでおらず、そこで弟に讀みを教へて貰つた事がありました。定日講義の外に文科講座が開講されて、羽溪先生の佛教講座を聽聞しました。是が

縁になり、芦屋佛教會館の日曜法話に於て、先生の來講されます時は、只今も楽しんで聽聞致すようになりました。堂友會が出来て、學期末には茶話會が催され、いつもあま酒が出ました。味も天下一品と誇り、懷德堂名物のあま酒になりました。西村先生の藏書が澤山寄贈され、コンクリートの書庫が新設されました。松山先生は毎日楽しんで書院として勉強しておられました。冷え込んで病氣に罹り、惜くも病が重くなりました。其當時先生は博士論文を提出されておられましたから。推薦の日を待つておられました。臨終直前でありましたが、病床の先生に博士の學位敬稱を報告する事が出来たと聞いて、一同の憂いが明るくなりました。私は芦屋市に店を持つようになり、それから聽講が次第に遠ざかりましたが、大東亞戰爭が起り、各種營業に統制整備が始まり、私も廢業して大阪の日窒KKへ務める事になりました。中之島の本社へ通勤致しましたから、再び聽講に行きましたが、空襲警報が頻繁になり、豊後町の堂へ行つても、開講と同時にサイレンが鳴り休講の止むない時が屢々でありました。それも暫らくでした。戰禍は惜げもなく懷德堂をも灰燼にしてしまったのです。中川様のお尋ねに依り、回顧して懷しく偲んでおります

## 思 い 出

御 堂 恒 祐

參拾數年？ 前の事で間違っていましたら御容赦願います。思い出しますと參拾數年前？の或日、朝日新聞に通俗講義として「日本国民經濟」？の演題で講演があることが出ていました。講師は京都帝國大學經濟學部の先生でした。土曜日の夕べ四、五回有ったでせう。それが打算的な私に最も強く残る記憶と收穫であつたように思へます。先生はユーモアたっぷり「これから物價が上がるから、江戸っ子と同じで宵越の金を持って居ては損をする。何でも良い物を持っていなさい。借金をしなさい」。又、今の米国の繁榮は元は農業だ。農業も悪くはないと、農業をするよう強調せられました。受講者も間接に傳聞した方も、大きな御蔭を蒙つただろうし、學理の偉大さを認識したでしょう。

次に理學の先生からは、鹽の結晶體は四角(立方體？)と教わり、地質？の先生からは滿洲には資源が澤山有る事や、法學の先生からは、結婚すれば直に結婚届をし、入籍しなければならぬ、そうで無ければ、犬猫同然と講ぜられました。近年主に古典文學講義に少々常識をも

挾まれ、眞に結構で、私のような文盲に等しい者でも、通俗講義で有難く思つて居ます。

## 烏潛のたはごと

長 澤 菱 花

大正六年頃、東區松屋町筋博物場所豐後町西向きに、木造平屋建築瓦葺家根の棟に鴉尾の舉つた特徴のある堂々たる偉容を誇つた懷德堂は、東に向つて門を這いれば「北側に二階建の事務所が有つて、正面は平屋造りの本建物、玄關には臺灣阿里山產出の樟樹の一枚板の豪華な大きな衝立があつて、次は大廣間で、奥に先賢師儒の祠堂のあるのが講堂で、北側に事務所より通ずる入口があり、其外側に木盤が釣り下げられ、槌で叩いて時を報ずる様になつて居りました。

大正天皇御大典記念事業の一端として懷德堂記念會が設立せられ、三宅石庵先生、中井覺庵先生並に歴代先賢の懿德を顯彰し、延いては學堂本來之傳統を受け繼いで、自由の精神、徳性の涵養に立脚し、庶民の啓發に資せんとの目的を以て、明治の始、學制變革期に際し中絶せしを重建、舊門人の手に依り古式に則つて記念祭典の行はれたのは、嚴肅にして印象的であります。大阪城天

主閣之再建の成つたのも此年。

理事長永田仁助先生、同小倉正恒先生、理事今井貫一先生、其他理事諸公、西村時彦先生、松山直藏先生、財津愛家先生、吉田銳雄先生、阪大、京大、諸先生の溫容聲咳に接し、懇篤なる薰陶を受けたる事は忘れられません。

大正天皇崩御之際、有名な誄詞を作られた西村天囚先生の講義で經子簡編上下卷を始めて聴講しましたが、矍鑠たる先生の豪傑肌の力強い講義は、昔日の儒者の面影を偲ぶに足るものが有りました。

松山先生の謹嚴冒す可からざる溫容は、誠に學堂の主宰者にふさはしき貫祿を有せられました。禮記の講義を拜聴したのが始めて有ります。武内義雄先生の指摘せられた孔子の「友あり遠方より來る、また樂しからずや」、兼行法師の見ぬ世の人を友とすの精神こそ、智見を弘むるに足るものと信じます。

或時古文書研究の權威中村直勝先生の御指導に依り、京都市堀川に有る古義堂を訪問して、伊藤仁齋先生の後裔に會うて、仁齋先生遺愛の大きな眼鏡、硯箱、尙東涯先生の新古今集手寫本並に詩文の筆跡、及藏書の一部等、是迄私有せられて居った仁齋先生より傳來の藏書は、全部倉庫と共に當時國家の重要保護になったとのお

話を承りました。目下奈良縣天理圖書館（參考館）世界的近代建築物に於て中村先生の手に依り整理せられ、保全の確保に勤めて居られる由、藏書は元より國寶級並に是に準ずる貴重物は、宜敷舉げて此の如き完備せる施設に依頼して、社會的に貢獻する事は望ましい事で有ります。古義堂古記録に依つて、大阪の懷德堂や天滿天神社との間に文學研究の上の往來のあつた事を承知して、益々懷舊の念を深めた事であります。

當時大阪學問所のシンボルとして識者の間に認識せられて居つたので、大阪入りせられた碩學の士の訪問を受け、一席の講演を拜聴するの機會を得た事は誠に仕合せでありました。例へば久邇宮殿下を始め政治家で篤學を以て聞えた清浦奎吾氏、滿洲國々務總理鄭孝胥氏、中国河北政事顧問王揖唐氏、等々であります。

中村先生御指導に依る現地講演の特に印象に残るものとしては、

南河内久米田寺の小楠公戰勝祈願文。

堺市開口神社の神社緣起（國寶）。

京都府山崎の賀陽宮（元八幡）所藏の織田信長、明智光秀、豐臣秀吉、油座の專賣權朱印狀。

光秀朱印狀下附の日附の四日目に豐臣秀吉の下附の日附があるのは面白く拜見しました。

南河内觀心寺大楠公首塚前の（石燈籠の銘）天明六年六月  
中井履軒先生自筆。

京都市上の醍醐寺の各時代を通じての山上の色々の建物は、各様式を異にする特色のある建築博物館を呈するの感あり、と中村先生の御説。又先生の特別交渉に依り雨乞の祈願の時より外に持ち出す事の無い平將門の舍利<sup>うづり</sup>。

## 想い出の旅記

土屋 隆 一

○ 懷德堂本年度（一九六五年度）の旅行會では、今夏の洛北正傳寺と光悅寺の訪問が非常に興趣が深かったように思われる。佗びしく靜寂で何か深い美を漂わせ、特に光悅寺では多藝なる作者の意を現代に傳へ、餘す處なきまでに修業の美點を世に傳えて居る處に、光悅の面目躍如として居るのを感じた。阪大木村先生や森先生のお話しに一段と興味が沸き、啓蒙される事も大變に多かった。

京都でも別天地の如き鷹の峰山を背景としたこの地區で、初夏の夕日を浴びて下山、市内にバスを乗入れると、騒然とした選舉運動に出合った。赤旗を押し立て、

赤い鉢巻でチンドン屋式の派手な宣傳である。京都は古來日本の歴史上の舊跡を最も大量に保有する靜かな土地であるのに、このような反逆があるのは残念だ。嘆かほしきは筆者のみでなからうと思ひ、一抹の淋さを胸に抱きつつ歸路に就いた。

○ 次の旅行は九月の紀州串本行で、天氣清朗、初秋の光を浴びて九時五十分天王寺驛を發し、急行黒潮號で約四時間で串本驛に到着。一應豫約の海月觀光ホテルに少憩、荷物を置いて觀光バスで古座町に向い、閑村としては非常に立派な成就寺に至る。森先生は豫てより同寺と接觸が多い由。同寺は禪宗虎關派で東福寺派に屬し、最近特に脚光を浴びており、日本畫の大家として有名な長澤蘆雪の傑作を多く藏している。突然の訪問に關らず、住持は親切に吾々をもてなし、長持に仕舞つてある畫（襖）や掛軸を取出して上中下間に飮込み、一同正座で森先生のお話を聞く。群雀圖、唐獅子圖、曹遊德圖、外何れも蘆雪傑作中の傑作で墨畫の輕妙なる筆致は正に神技の境を表現し、先生の解説で更に一段と光彩を添へる。

一同は只だ感心するばかり。

蘆雪の遊歴は、伊勢に七度び、熊野に三度びに及ぶ。

紀州は熊野三山を擁して速玉、那智、本宮といづれも古い傳統のある地であるが、この蘆雪の成就寺や無量寺への訪れは、本當は奈良東福寺の應舉を招く筈を代理として彼が來たのであった。若き蘆雪も當時は酒好きであった。各所に畫を所望され描いたと傳へられ、數量のみならず、力作の多きもこの紀州であり、安藝や三河での作品は、歳の勢もあり筆力の低下が見えるが、ここでは師匠圓山應舉よりも達者なる筆致を現わし、寧ろ畫の王座は蘆雪との感が深い。寺へは勞を謝し、さらに毎月に奇勝橋杭岩を見、磯邊の美を車窓にながめて引返し、少憩湯槽に浴して旅の疲れを休める。中廣間に卓を圍んで、森先生を中心に今日の旅程を話題にビールをくみ、楽しい夕食の宴。歌に名高い向いは大島に灯りが入り、夕月の昂るを見守る婦人達に何か詩情が沸く。聊か皆んなも酩酊し、隠し藝が飛出して興を添へた。お披き後、各自室に寝をとる。波靜かにしてオゾンを含む海風に都塵の煩しさを忘れ、和みと樂しさが一パイ。翌朝八時に食事を喫し、ホテルに別れを惜しむ。宿の主人も案内の勞をとられ、一行は本日のコースに就く。無量寺は串本町屈指の名寺、錦江山を背景とし、前述成就寺と同派、特に最近同縣小野知事の肝入りで、昨年「應舉蘆雪館」が竣成し、串本に來る心ある人士は、ここへ觀賞の杖引く、

地元唯一の觀光施設となった。土地の有志宮本先生の案内で住持の概説を聞き、館内に入る。波上群仙（水墨應舉筆）、龍虎圖（水墨蘆雪筆）、群鶴圖（同）、掛幅揚柳觀音（同）、寒山拾得（同）、大燈国師（水墨白隱禪師筆）等々何れも文化財指定で感銘深きものばかり。昨年先生はニューヨーク、濠洲を訪問され、其の後彼地大學の美術の先生の訪日あり、無量寺を紹介したところ非常な感動をして研究して歸ったそうで、早くも海外に迄其の名声を博すに到っている。串本町會も極力後援し、土地の文化財保護と觀光客誘致とに縣も乗り出してゐる。斯くて意義ある舊跡探訪と興味ある觀光とを終へ、黒潮磯を洗う潮の岬檜野崎燈臺を參觀し、薄暮歸阪の途に就いた。

註 人間最高の精力とは、若さ、智能、技術とが綜合的に發するもので、人生一代にそう幾たびもないことを知った。蘆雪の紀州遺品は其の中の傑作である。

## 見学の記

本田 弘

一、神光寺

六月十三日、うっとうしい梅雨空の下、一行は近鐵上六驛を十時三十三分發信貴山口行準急で服部川に着く。

急な石の多い坂道を登ると、遠近には植木の苗が澤山植えられ、信貴の山々が眼前にくっきりと見えて美しい。

二十分程登ると神光寺の門に出た。右手の方に以前竹林のあった所が全部切られて畑になっている。この寺は曹洞宗の末寺との事だ。本堂に上って三宅萬年先生の懷徳堂關係の唯一つの掛軸を拜見、さつきの花が美しく咲き亂れる庭園を眺める。これが一目千金というのであろうか。休息後、先賢諸先生の墓參途中、ほら穴があり、古墳の跡との事だった。昔つゝが虫の害があり、又火の雨が降るので、此處は避難する所だと間違へ傳へられている由。點在する墓の中を通過して先生の墓に着く。雑草はきれいに刈り取られ、淨められていた。

懷徳堂先賢諸先生の墓を永く大切にすることは非常に意義ある事だと思ふ。

禮拜後、山口委員が墓前で吟詠を獻ぜられた。本堂に戻り、晝食後總會に移った。淨める様に激しい雨が降り出して來た。

王仁博士の墓詣りは中止する事になり、三時過ぎ一行は歸途に着いた。折があればもう一度訪れたいと思つて居る。

昨日東城醉 歸來月正圓

曉風多索緒 幻夢到梅邊

三宅萬年先生の詩である。

## 二、西大寺大茶盛式

初夏の太陽を浴びて、七月上旬、私達は近鐵上本町驛を後に西大寺に向つた。車窓から涼しい風が吹込んで來る。生駒の山が大きく見えて來る。四十分程して西大寺驛に着いた。

驛を出て十分程歩くと、西大寺の門前に來た。色々の堂塔の中を通り本坊に着く。三十人位なら平常でも大茶盛式を開くとの事だ。

大茶盛式は叡尊が延應元年（西歷一二三九年）正月、菩薩流の歳首御修法を行つて玉體安穩萬民豐樂を祈願し、十六日の結願には八幡宮に獻茶、その餘服を囊集する衆生に喫せしめられたのに始まり、吃驚に値する使用器具の巨大なのはこれに由來する。

床の間には大きな松を作り、雪景にたとへて綿を一面に頂いている。その前に八幡様をお祀りしてある。

一抱へもある様な口徑一尺二寸の茶碗に、水指も釜も總べて大きいのに驚かされる。

大筆の様な茶笥で茶を立て、五人に一個の割で大茶碗

が配られる。一人で持つと少し重いので、兩側の人に助けられて頂く。味は又格別でおいしい。各所に笑いの聲が聞えてなごやかな空氣に包まれる。

## 阪倉先生を圍んで

昭和四十一年二月十三日 京都吉田阪倉先生邸に於て

出席者 阪倉篤太郎先生

中川 幸三 酒井全太郎

藤塚 誠二 山口 正男

## 山口 正男 編

中川 始めてお出まし願いましたのは、昭和八年でしたか。

先生 えゝそうです。始めは古事記で、濟んでから枕草子、それから萬葉になりました。萬葉は大分前から續いておりました。一からずっと始めて十二位までゝ半分位です。

中川 木曜日は盛んでしたね。先生の時は春からでしたね。漢學史をやっておられた大江先生とご一緒じゃなかったですか。

先生 いや一緒じゃなかったです。週二回でした。二

階の書庫のところでやりました二三年續いたと思います。

中川 大江先生が亡くなられてから、先生ばかりでしたね。その時分は世の中も落付かんで、五六人位か十人までに止まりましたけど――

先生 そうそう、ひどい時はもう三人位でした。

中川 戦災の荒果てた部屋で感心しましたね先生……先生 感心しましたね。よう續いたと思います昭和八年からです。戦争で焼けてから假事務所が建ちました。私は昭和二十三年頃まで行ったように思います。

この後關西學院の齊藤先生の説明で、金堂や巨大な大塔の礎石、靈寶館の佛像、舍利塔等を見學して、石塔で有名な般若寺に向った。